



秋の講演会

鼎談「深田久弥を語る」終わる

恒例の秋の講演会が、盛況のうちに終わりました。深田森太郎・藤本慶光・大森久雄の三氏を講師に招いての鼎談は、深田さんとごく親しい人たちだけあって、飾らない作家の人間像が語られました。会場には関西はじめ



10月4日 鼎談会場にて 撮影 小泉義彦

緑爽会報 NO.112

12年10月25日

発行

公益社団法人

日本山岳会 緑爽会

☎ 03-3261-4433

事務局 松本恒廣

夏原寿一 近藤雅幸

近藤 緑 川口章子

横山 隆 渡部温子

緑爽会11月山行

ししどの窟から城山

湯河原駅から路線バス利用で幕岩公園に行き、幕岩を右上に見て歩いたその先を反対に左斜面を登って源頼朝ゆかりの「ししどの窟」經由で土肥実平の居城跡と言われる眺望の素晴らしい城山に登るプランです。

日時 11月11日(日)日帰り 雨天中止
集合 湯河原駅③番バス乗場 午前10時発
幕岩公園行き車内

コース 湯河原=幕岩公園— 瀬橋—ししどの窟—城山—湯河原駅

歩行時間 約3時間10分 地図 箱根・熱海
係 横山隆 ☎03-3704-1687 留守電にどうぞ。

地方支部から参加された方もありました。記録は次号に掲載予定。この号には当日配布の資料の一部を掲載しました。鼎談の事前学習としてお読みいただければ幸いです。(編集)

【出席者】田村佐喜子・早川瑠璃子・松本恒廣・近藤緑・関塚貞亨・里見清子・渡部温子・横山隆・奥野道治・鳥橋祥子・川上進・大島洋子・島田稔・福原サチ子・富澤克禮・夏原寿一・田井具世・川口章子・中尾千予光・小泉義彦・渡辺恵美子・近藤雅幸／穴田雪江・飯田年穂・石岡慎介・上村信太郎・白木博信・宇野良夫・大森喜夫・岡義雄・笠松幸衛・鎌木昭夫・木村慎・小池興四郎・向後元彦・向後紀代美・高橋満男・滝上欣市郎・中島忠・中重賢治・西谷隆宣・布川欣一・林善八郎・広瀬博道・宗實慶子・山田誠・山本良三・渡辺博厚

【講師】深田森太郎・藤本慶光・大森久雄 計51名

■忘年会は12月11日(火)午後の予定です。

〔9月山行〕

小檜山

夏原寿一

前夜からの雨は上がったものの雲は低い。だが、笹子のトンネルを抜けると青空がのぞく空……よくあるパターンの日だった。

登り一タクシーで焼山峠着。

前日の雨で草には露がつき、足元が濡れる。小さなアップダウンを繰り返しながら石を過ぎると、

新道と旧道の分かれ道に出た。新道を見上げると丸太の階段。「楽な方を行こう」の声もあったが、「この登りは50メートル」の声に押されて階段へ。しばらく行くとガスの中に入ったが、頂上はすぐ目の前だった。

頂上——平らな頂上には長い丸太が2本あって、大休止には格好のしつらえだ。お弁当を広げていると、急にガスが晴れてきて富士山が見えた。富士は思いのほか高い位置にあり、流れる雲の下にはブドウの里・牧丘が広がっている。なかなかの風情だ。「ここへ来たらずっぱり富士山だよ！」の声も聞こえる。回ってきた手作りの漬物や冷たい果物をご馳走になりながら、ゆつくり時を過ごした。

下り——頂上からはジグザグの急な下りだ。足元に注意しながら下っていくと空が暗くなってきた。なにやら怪しい雰囲気。その薄暗さは、ヘッドランプのほしいほどだった。

父恋し道の分岐の手前で、長くて急だった下りが終わってホッとしたところに待っていた。

た。



山頂にて 後列左から島田・梅本・松本・田井・田村・里見・大島・夏原 前列 鳥橋・川口・渡部の皆さん

たのは、コンクリート舗装の真新しい林道。おしゃべりに花を咲かせ、膝をかばいながら思い思いのペースで下る。その頃には空も明るくなり、陽射しも出てきた。出会う人もない静かな山だった。

タクシーの手配など、里見さんには一方ならぬお世話になりました。ありがとうございました。(2012・9・25)

【参加者】田村佐喜子・梅本知栄子・松本恒廣
里見清子・渡部温子・鳥橋祥子・大島洋子・島田稔・田井具世・川口章子
横山隆(写真) 夏原寿一(係) 計12名



「深田久弥 山の文化館」特別展資料から

春秋（第62号、昭和33年・1958年2月発行）に深田さんが書いた「混まない名山—品格と孤独に憧れて」を私が読んだからです。私が25歳のときです。そこで深田さんは、日本百名山を選んでみたい、と書いています。それ以前に私は深田さんと仕事のお付き合いをしておりました。

『日本百名山』の誕生と

深田さんのこと

講師 大森久雄

きょうは、深田さん、という呼び方にさせてもらいます。また、いろいろな方の名前が出てくると思いますが、原則として敬称はなしとさせていただきます。

*

深田さんは『日本百名山』を昭和15（1940）年にも書いています。「山小屋」という雑誌（朋文堂発行）に連載して、20山まで書いて中止しています。深田さんは雑誌が廃刊になったからだと書いていますが、「山小屋」の廃刊はその1年半後だから、これは深田さんの勘違いです。この『百名山』は現在のものとは構想も構成もまったく別で、あまり実のある内容ではありません。このとき真面目にやっていたのですか？と言いたくなるような内容です。しかし、戦後の、つまりいまの『百名山』は深田さんが自分の人生を賭けていて、気迫の度合いがまるで違っ。

戦後の『百名山』誕生のきっかけは、「別冊文藝

平と堀辰雄に習って、その後は独学で勉強したのですね。ということから、原稿を受け取るので、深田さんのお宅に何回か通いました。

昭和33（1958）年春、深田さんはヒマラヤに行きます。そのとき、私は見送り（東京駅や出迎え羽田空港）に行っています。東京駅では特急つばめの最後尾の1等展望車のデッキに深田さんたちは立っていました。一行の席は3等車だったらしいけれど、写真撮影のために発車のときだけそこにいてもいいということだったようです。それでヒマラヤから帰ってきて『百名山』の企画の相談をしたのですが、それがいつだったか、覚えていないのです。たぶん秋だったろうと思います。しかしすぐには実現せず、朋文堂から出ていた山の月刊誌「山と高原」に掲載が始まったのは翌年、昭和34（1959）年3月号からです。

1回2山、ひとつの山が400字5枚でした。とてもいい内容で喜んでいました。『百名山』がなぜいい企画だと思っただかといえ、私は山の雑誌が体育会系のものではなく、文芸的というか、こころの世界としての山登りを扱ったものでもありたいと思っていましたので、その意味からすると、深田さんは小説家で、書き手の持っている文学性と文章力は問題なし、山の経験も豊富で、それら

屋久島を巡る回想とわが死生観

狂歌師 翠柏山人（羽賀克己）

全く予想もなかった胃痛が確認され、6月下旬から入院を繰り返しての抗癌治療と輸血、さらに脱肛手術というおまけまで体験したあげく、8月28日に胃と胆嚢・脾臓の全摘手術を受け、9月8日に無事退院しました。

この間、病床で浮かんだ凡そ半世紀前の、文字通り人生（死生）観を一変させた屋久島での体験やその後の歩みなどを回想し、屋久島という自然を巡る生態系と輪廻転生説を結び付けた私自身の叙事詩ならぬ壮大な叙事詠のつもりです。（2012・9・27）

・吾が今生断じて悪には渡さぬと脳裏に浮かぶ若き日の山

・東の向に病み萎え瘦せた筋肉に山を駆けたる若き日想う

・予期せざる深雪に登高を阻まれて空身ラッセル年末の屋久島

・その頃の最古を大五杉と呼び縄文の名はまだ聞かざりき

・現在地不明のままに岩陰でビヴァークしたり深雪の中

・人里を間近に控えた沢の辺で香流による再のビヴァーク

・憔悴の吾を招きお屠蘇にと梅酒賜いし屋久島の婦人

・若しあの日荒天止まずば屋久島の溪の幽鬼か太平洋の藻屑に

・あの日若し溪の幽鬼になりたれば君に逢うことあらざるものを

・南海の海の藻屑と果てしかば君との出会いそも意かりしぞ

・単独の二人が行方不明とは下船間際の甲板で知る

・天運に恵まれ還りし吾が魂不惜身命いかに報いむ

を融合すればいいものになる、理想的な企画と執筆者だったからです。

私は連載開始から1年後、新雑誌創刊の仕事にまわることになり、そのまた1年後には会社をやめてしまったのですが、連載そのものはとても評価が高かった。深田さんと付き合った編集者はみんな同じことを言うのですが、深田さんは原稿が締め切りに間に合わない人でした。いちばんひどい時には、あすから印刷が始まるという時点で原稿が手に入らないことがありました。でも、連載は1回2山だから1年に24山、4年2ヶ月で完了するわけですが、きちんとそのとおりに終わって、ただの一度も休載はありません。それができたのだから、原稿が遅いとはいっても、たいへんなエネルギーだし、やはり深田さんは意気込みがすごくて気合いが入っていたと思います。気遣いもあつて、連載では一回に取り上げる山を、南と北、東と西、という具合にバランスをとるというサービス精神もありました。編集者のな才能もあつたということですが。

連載は昭和38(1963)年に完了して、翌年7月、新潮社から立派な単本で刊行されました。11月の朝日新聞の文芸時評で林房雄がこの本をとり上げて、ベタ褒めしました。その翌年には読売文学賞をもらいます。朝日の文芸時評を、山の文筆の世界では有名な安川茂雄さん(私の先輩です)が、当時、あれは仲間褒めだと言っていました。たしかに林房雄も、読売文学賞の選考代表の小林秀雄も、戦前の深田さんの仲間です。小林秀雄は深田さんと何回も一緒に山に登っています。並の仲間じゃない(小林秀雄全集)または岩波文庫『山の旅 大正・昭和篇』所収「カヤの平」参照。だけど仲間褒めという言い方をしたら、文壇なんかみんな仲間ですね。

小林秀雄の『百名山』への評価は、仲間褒めなっているという尺度を超えてこの本の核心をついています。つまり「山を対象にした批評文学」と言っているのです。批評というのは誤解される言葉だから

ら注釈を加えますが、たとえば「(注・深田久弥山の文化館)の高田宏館長の著作『木にまぐ』の新潮文庫版の解説は池澤夏樹です。そこで池澤さんは高田さんのこの本を、木を対象にした批評文学という意味のことを言っています。そして「批評とは流行作家の新作の評価などというつまらぬ仕事ではない。先人の知恵を深い井戸から組み出して今の人の喉(のど)を潤(うる)おすこと、紙に書かれた言葉を頼りに古人たちと語ることである」と言っています。深田さんが山を相手にしてやったこともそういうことなのですね。

連載は内容充実、評判もいいということでもう少し長く書いてもらおうと、あるとき深田さんに話したところ、これ以上長くすると文章がだれるからダメ、と即座にはねつけられました。読売文学賞の評価で小林秀雄が『百名山』の「文章の秀逸」と言っています。それは「50年の経験からくると。しかし、私から見れば、原稿用紙5枚だぞ、という覚悟からだと思つたのです。その覚悟を深田さんはこの連載に込めたのです。深田さんは、のんびり屋と見られてきましたが、こういうシビアでストイックな面も持ち合わせていたのです。それが「文章の秀逸」を生んだのだと思います。

*

話が少し堅くなってきたから変えますが、深田さんは、鷹揚で、こまかいことにこだわらない、おらかな面がありました。北陸の作家には珍しい乾燥型で、北陸が雨でも深田さんの上には雨は降らないようだったと、文芸評論家の小松伸六は追悼文に書いています。

『百名山』が出来て親しい方が集まりお祝の会をしたことがあります。私も出席しました。鎌倉文士仲間の今日出海も来ていました。井上靖も来ていた、と書いてある本がありますが、来ていません。井上靖が来たのは、読売文学賞のお祝いの会のほうです。それはともかく、定刻になってみなさん着席しているのに、肝心の深田さんが来ない

・ 死線越え生きて還れた恵みには娘二人がこの世の人に

・ 君に逢うことをなかりせば娘らも愛し孫らも世にあらざるに

・ 孫達よ君らの父母も記念にと縄文杉に逢うて来たのだ

・ 縄文の杉の古木は枯れるとも輪廻巡るが自然の摂理

・ 千年の杉もやがては枯れ果つも屋久の自然は永久に輪廻す

・ 世の常とやがて去りゆく命から子孫に伝えむ確かな未来

・ そのことを孫に伝えむ吾が命大地に還るその時まで

・ 悲しむを惜しむを吾が死吾が願望は大地に還る宇宙の微塵

のです。志げ子夫人は先に家を出たということになっていました。どうしたのかとみんなが心配しているときにやって来ました。東京オリンピックのときで、その最終日、マラソンがあつて(アベベが優勝、日本の円谷が3位になったときです)、そのテレビを見ていたから、ということでした。自分の本のお祝いの集まりだというのは、それを横においてテレビを見ている、というので、みんな深田さんらしいねと笑ったことでした。出席者をひとりずつ深田さんが紹介し、それぞれがひと一言、なにかしゃべる、という、和やかな温かな集まりでした。

そのひと言で今日出海が「深田は山に入ると人が変わったように颯爽とする。小林秀雄君などは下界にいると威張りくさっているのに、山に入ると深田君に命令されて、いそいそと薪を拾いに行く」と言っています。(一部省略)
翻訳のときもそうですが、連載のときには毎月一度は世田谷松原のお宅にうかがっていました。

平屋で、かなり広い庭と生垣がありました。私が毎月通っていたころには、まだ丸山々房はありませんでした。入口が木戸になっていて、それががたびし、傾いて倒れそうなので、戸がすんなりとは開かないのです。ゆすつたり、たいたたり。そこに鈴がついているから、それがちりんちりん鳴るのです。私はそれがいやで、なんだか肩身のせまい思いをしていました。

木戸を直すカネがあつたら資料の本を買う、というのが深田さんの流儀でした。「暮らして低く志は高く」と書いていますが、それが深田さんの人生哲学です。私は、深田さんのことで、失礼ながら「ボロは着てもころは錦」という言葉があてはまると書いたことがあります。これは私の好きな言葉で、そうありたいと思つているのですが、これは「暮らして低く……」と同じことなんです。最近「錦は着てもころはボロ」というのが多いようですが。

*

ここで奥さんの志げ子夫人のことを少し。志げ子夫人は編集者の味方と言われていましたが、編集者はだれも志げ子夫人に助けられたり励まされたりしていません。私もそうです。なぜかと言うと、とにかく深田さんは原稿が締め切りに間に合わない。印刷が始まる前日に原稿がない、という状態になったこともあり。私は、もう頭の中が真っ白、顔面蒼白、半分泣きべそだったと思います。が、そういう状態のときに、大丈夫、あした来てください、かならず渡します、と請け負ってくれて、翌日朝行くと原稿を渡してくれました。なんでもそうなるかと考えると、志げ子夫人は原稿の進行具合を全部つかんでいるのです。だから、あと一晩あればできあがると、読めたのでしょうか。とても知的で、明るく、ほがらかな方でした。

いい点はたくさんありますが、深田さんにとっていちばんよかったのは、本に対して拒否反応を持たない、ということだったでしょう。深田さんが家計を圧迫するような状態で資料本を買い込む、ということになっても、拒否権行使をしない。しないどころか、積極的に協力しているのです。深田さんが高価な本を買い込むエピソードはいくつもありますが、あるとき、深田さんの旅行中に書店から「アトキンソンの本」が見つかったという連絡があったそうです。ふつうの奥さんだったら、帰るのを待つか、知らんぷりをするかでしょうか。しかし、志げ子夫人は深田さんの旅先を追いかけ電話して、アトキンソンの本を買いのかどうかと聞いている。購入すると決まると支払いをどうするかの話で、電話を聞いていた息子さんが、アトキンソンならば前金にしたら、といったというエピソードがあります。家庭内が明るいのです。本をめぐるてもめのないのです。

深田さんが書いていますが、「たまに不時の収入があると、それを貯蓄しようという美德に欠けている点で彼女は私に似ていた」というのですから、うまい組み合わせだったのです。

志げ子夫人が深田さんと二緒になったのは戦前

ですが、そのころとしてはずいぶん進取的な方だったと思います。知り合ってすぐに小谷温泉山田旅館に行っています。雨飾山に登るためですが、

雨のため何日も待ち、結局登れませんでした。その後、糸魚川に出て、その海岸でスリッパ1枚になって海に飛び込んでしまふ。志げ子夫人の「私の小谷温泉」(「アルプ」176号・1972年)

という文章にそう書いてあります。昭和15(1940)年のことです。そういう時代状況を見ると、かなり飛んでるお嬢さんです。おふたりはとも仲が良かったから、登山も5回に1回は一緒に行っていたようです。志げ子夫人の亡くなった日も、深田さんとほとんど同じ、ふたりとも畳の上ではなかったという点まで同じ。そこまで仲良くしなくてもいいのに、と思いましたが、深田さんは、

志げ子夫人と一緒にならなかったら戦後も鎌倉文士でいたろうと書いていますが、鎌倉文士のままだったら、たいへん失礼な言い方になります。深田さんは沈没していたかもしれないと思えます。志げ子夫人と一緒になかったことは深田さんにとっ

てはものすごく大きな意味があったと思います。戦後の深田さんは、豊かではないにしても気持ちも生活も落ち着いて、書くものからみると、どっしりと腰をすえているところがある。そうでなければ、『百名山』も『ヒマラヤの高峰』も『中央アジア探検史』も私たちは読めなかったらどうしようと思

います。深田さんが亡くなった後、志げ子夫人は、本代と酒屋の支払いがなくなり楽になったと言ったそうです。酒は深田さんではなく、たくさん訪ねてくる人に飲ます分ですね。私は深田さんのお宅で酒を飲んだことは一度もありません。外ではありましたが、私が原稿をもらいにいくのはいつも午前中、しかも締め切りを過ぎていたのですから、一刻も早く原稿を持って会社に行かなくてはならない。落ち着いて、酒を飲みながら長話をする余裕はないのです。

いま『百名山』がいろいろな意味でもはややされていきますが、さてその実態は、となると問題がとても大きい。

『百名山』のリストは最初からあつたわけではありませんが、7割は問題なく決まった、と書かれています。たしかに、白山や槍ヶ岳を落とす人はいないから、だれが選んでも7割は同じ山になる可能性はある。問題は後の3割ですね。そこに7割を含めて選者の選ぶ条件、つまり個性・思想が出てくる。深田さんはその条件を「山格、個性、歴史」と言っています。こういう深田さんの山への対し方、そこを汲みとらなくては意味がないのです。が、いまはそういうことは関係なく『百名山』の目次だけがもてはやされています。『百名山』のガイドブックがいくつも出ています。ただ登るだけのために、ご本尊の『百名山』とそれが持っている思想は片隅に追いやられているのです。

ガイドブックだけが生き残って本体は消えてしまふ、ということにもなりかねない。たいへん至(いび)な状態になっています。朝日新聞社は『深田久弥山の文学全集』全12巻や『深田久弥山の文庫』全6冊など、とてもいい仕事をしてくれたのですが、『週刊日本百名山』という商売品も出しました。それによって『百名山』は朝日新聞社選定と思ひ込む人が出てくる、という状態になってしまった。こういう状態はなんとかしなくてはならないと思います。

深田さんは、未知を求めて遠く旅する者に神はそのパラダイスを開く、という『コラン』にあるという言葉が好きで、よく書いています。たしかに、深田さんが生活を犠牲にするような状態でヒマラヤ探検の文章を書いていたのは、ネコも杓子もヒマラヤ、といういまの状態とは違つた時代でした。未知未踏がいたるところにあった時代でした。そうでなければあんなだけの情熱を向けることはなかったと思います。『ヒマラヤの高峰』は、もし英語で書かれていたら世界的な評価を得る内容を持つていると思います。『百名山』だって、だれ

もやっていないから、そこに未踏の領域があつたからでしょう。

小林秀雄は「深田には山があつてよかった」と言ったそうです。複数の証言があります。たしかにそれがあつたために、私たちは先ほど挙げた3点を読めるのですから。そして『百名山』は深田さんが書いてくれたからよかったです。いちばんいい人はいちばんいい企画がめぐり会つたと言えるでしょう。また、深田さんにとっての「山」に相当するものは、それがなんであれ、人生でだれもが持っているのが望ましいものではないのでしょうか。

最後になりますが、深田さんが嫌つた山登りは旗をたててゆく団体登山。静かではない山登りです。しかし、いま百名山には、そういうグループ、そういう騒がしい山登りが押し寄せています。競争的な山登りもいけません。深田さんの山登りには余裕があります。せかせかしていない。山がもつているすべてをゆっくり味わおう、という余裕ゆとりです。私は永年編集者をしてきて、何百冊の本を作ってきました。本づくりでむずかしいことの一つは、ページでの余白のとおり方です。余白のとおり方によって本は生きたり死んだりします。余裕というのは、いわばこの余白みたいなものだと思います。それがバランスをとっていることによつて、山登りも生活も人生も生きてくるのだと思ひます。そこに思ひをいたして、深田の山登りを復活しましょう。この山の文化館を発信基地として。

(2010年9月5日)
★、石川県大聖寺「深田久弥山の文化館」特別談話会での講演を転載させていただきました。紙幅都合上、一部省略した部分があります。(編集部)

編集後記★講演に続いて鼎談「深田久弥を語る」は次号に掲載。★大病から復帰した羽賀さんの心境詠が胸をうちます。★忘年会では国見利夫さんが思い出を語ってくださる由。★年明けには南アルプス声安山岳館訪問を計画。どうぞお楽しみに。(近藤謙)